



1961. 8. 28. 発掘
29.

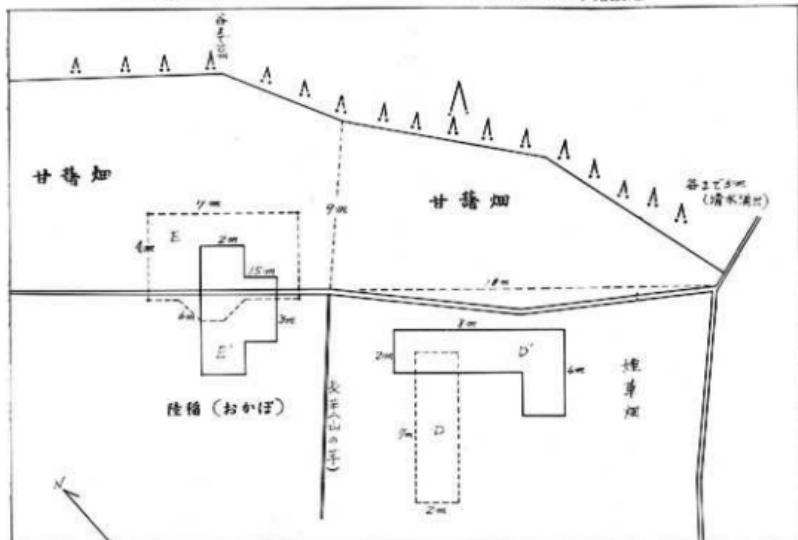
昭和 37 年 3 月

桜峠遺跡調査報告書

(下)

富山県教育委員会
魚津市教育委員会

桜峠遺跡発掘地図 D.E. 1960年発掘地
D'E' 1961年発掘地

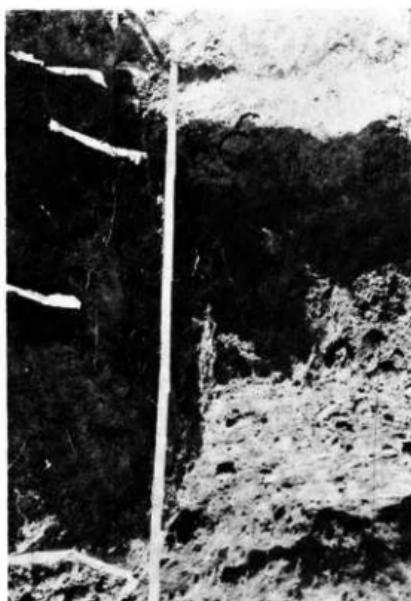


附図 1

埋藏写真 (1)

→ 地表に見えるのは中期遺物

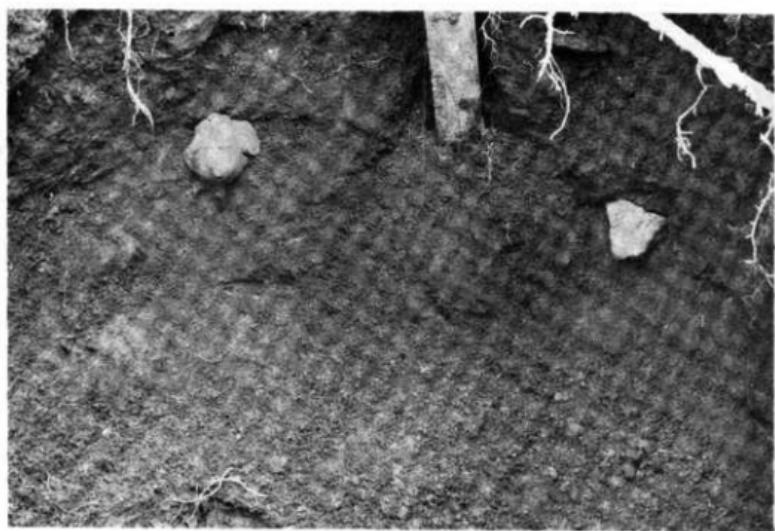
→ 図中の間に見えるのは早期遺物



図版 1

D'地区南西隅

埋 藏 写 真



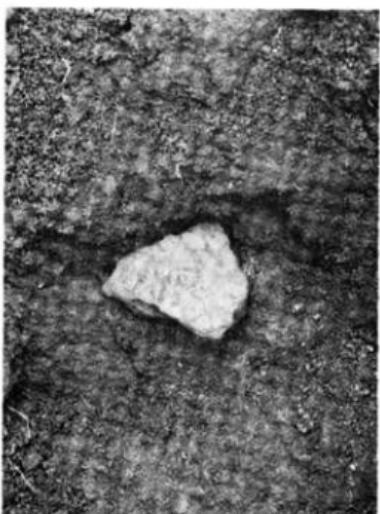
圖版 2

押型文土器、及び、底部埋藏状況



圖版 3

押型文土器



圖版 4

押型文土器



図版 5 小型無文土器（E' 地区出土）



図版 7 「E'」炉址の洗出し



図版 6 同上埋藏状況



図版 8 「E'」炉址及び古跡の洗出し

序

魚津市桜井は早期押型文（長円文）土器を包藏し考古学上貴重な遺跡あります。本県教育委員会は国立博物館考古学課長八幡一郎博士の指導のもとに昭和35年8月この遺跡をはじめて発掘調査して多くの成果をあげました。ことに本県には数少い「住居址」「炉址」などを完全に近い状態で発掘できたことは大きな収穫がありました。その状況は桜井遺跡調査報告書（上）に述べてあるとあります。

引続いて昭和36年8月に第2回の発掘を行ない数多くの縄文早期遺物（押型文土器）の発見により、その地区が早期遺跡であることを確認されたことはまことに幸いでありました。

悪天候にもかかわらず熱心に発掘調査にあたつて下さった関係各位に心から感謝いたします。この調査には富山県考古学会長濱長氏ほか会員諸賢、本県出身の好学の大学生諸氏ならびに地元中学校、高等学校のご協力を煩わしました。特に魚津市大町小学校教頭広田寿三郎、同市光学坊大谷清瑞の両氏にはこの報告書刊行に多大のご尽力をいただきました。厚く謝意を表します。

今回で、一応桜井遺跡の調査を完了いたしますが、この報告書を広く活用していただき、文化財保護に対する一層のご協力を希望いたします。

昭和37年3月10日

富山県教育委員会教育長

河野宰治

序 文

先年、桜峠遺跡調査報告書の上巻を世にあくり、いまここに統いて下巻を刊行する。

それは、1960年夏の発掘は、時間と労力の不足のため調査未了の中に中止せざるを得なかつたため、1961年の夏、継続発掘を行ない、その完成を期したのである。

今次発掘の目的とするところは、縄文式文化早期押型文土器の出土状況の確認と中期の住居址の完全な洗い出しにある。前者についてはその目的を達成したが、後者については、ほぼ目的を達成したけれども完全な調査結果を得られなかつた事を遺憾に思うと共に、学問の道の遠く陥しいことを痛感させられた。

しかし、われわれは北陸においては数少ない縄文時代早期の人類の生活の跡を究明し、いささかなりとも日本の考古学界に貢献し得たことをひそかに誇りとすると同時に、郷土魚津にこのような文化遺跡を有することをひろく一般市民に訴え、郷土の誇りとして大切に保存し、われわれの遠い祖先の足跡を回顧し、愛郷の精神を涵養したい。

最後に、この発掘調査及び報告書の刊行に尽力していただいた方々に深甚の謝意を表する次第である。

1962年3月

魚津市教育委員会教育長 山本允彦

目 次

I	目 的	1
II	調査の経過	2
III	発掘記録	3
1.	D'地区発掘記録	3
2.	E'地区発掘記録(住居址)	4
IV	遺物報告	6
A	自然遺物	6
B	石 器	6
C	土 器	7
V	結 語	9
図 版		図 版
I	埋 藏 写 真	1~6
II	炉 址	7~8
III	石 器	9~12
IV	土 器	13~27
挿 図		附 図
I	桜峠遺跡発掘地図	1
II	D'地区発掘記録図	2
III	住居址平面図	3
実測図		
I	押型文土器復原図及び無文小型土器	復原図及び実測図 22
II	石 器	23~28
III	土 器	1~21

I. 目的

我々は1960年8月に行なつた第一次桜井発掘に続いて、1961年8月28日及び29日の翌日に渡つて第二次発掘を試みたのであるが、それには次の二つの目的があつた。(桜井遺跡報告書上巻参照)

先の第一次発掘において、29片の押型長円文土器を採集し、桜井は繩文式早期遺跡であるとの、ほど確信を得たとは云え、この時トレンチしたD地区をその遺跡と確定するには、なお、資料の不足を認めない訳にはいかなかつた。とは云え、かつて40年前、早川莊作氏がこの押型文を採集されたのはE地区付近であつたが、そのE地区からは全然押型文が発見されず、只C地区から一片の押型文が他の多くの土器片に混入していたのみで、それに対して、D地区から少なくとも発掘によつて押型文を発見したのであるから、広い桜井中この地区を限つて早期遺物の埋蔵地とすることも行過ぎではないであろうが、今少しその裏付けとなる資料を入手したいと云うのが、その第一の目的であつた。そして、それは後に記す発掘記録によつて知られるとおり、ほゞその目的が達せられたといつてよい。

第二の目的は住居址の追及であつた。我々がこのE地区を選定したのは、先にも述べたように、40年前早川氏がこの辺から押型文を表面採集されたと云うことによるのである。併し初めに選定した箇所からは一片の土器すらも得られなかつたが、その南西の辺において数個の石斧、数多の土器片が得られたので、更に南西へ2m発掘を延長した結果、炉跡及びその周辺に柱跡と思われる穴を数個所発見したのであつた。併しその時は作業は既に終りまぎわであり、而も他のA、B、C、D地区では復原も終つていたので、この住居址の追及は次の機会に期待して上巻において報告した通り終つたのである。従つて今度の発掘ではこの住居址の追及が重要な目的の一つであつたのであるが、この度も時間の不足その他の理由で充分にその目的を達することが出来なかつた。併しながら、今後のためには貴重な経験をしたことを加えておかねばならない。既に予想が立つてゐるのであるから、住居址の全貌を洗い出すことは簡単なように思われていたのであるが、その中心である炉の露出に既にかなりの時間が費されねばならなかつた。従つて1960年の発掘による炉址の洗い出しにのみ時間を費してほとんど新事実を発見することが出来なかつた。それによつて先ず時間の不足が痛感されたのであるが、それ以上に充分なる経験者の労力と、この労力に協力する別の多量の労働力の必要を知つたのである。今後今一度我々にこの住居址発掘の機会が与えられたならば、充分な時間と、経験者の協力と、充分なる労働力を準備しなければならないであろう。

II. 調査の経過

1960年8月の発掘が調査未了の中に、中止せねばならなかつたので、今年はその継続発掘をした。目的は早期押型文土器埋蔵状態の確認と生居址の鮮明にある。

県教委、市教委では今回の発掘を昨年末予定し、準備を進めていた。そして県考古学会、魚津高校、魚津市東部中学校へ発掘を依頼した。

8月27日（日曜）雨後晴

高島、広田の両人で、明日からの発掘地区を決定した。昨年の発掘地を再確認し、今年度発掘の目的に添うてD地区、E地区の延長分を測量し範囲を擴張した。（略図1参照）当口、県考古学会の早川氏が来られこの作業に参加された。

8月28日（月曜）晴

朝来の雨で、一時実行を躊躇したが後晴れとなり、同市バスで現地へ向つた。参加者は県教委松島弘作（社会教育課長）野上貞二（文化係長）五十嵐精一（主任）魚津市教育委員会本允彦（教育長）廣瀬新作（社会教育課長）岡崎寛（主事）県考古学会漆原、早川莊作、林夫門、栗山等の諸氏、地元では、大谷清瑞、高島清祐、広田寿三郎外に富山大学生2名、国学院大学小島、魚津高校卒業生高木、上里等の諸氏であった。

10時頃から発掘開始、今年は特に慎重に発掘を進め、微細な泥でも丁寧にふるい調査した。D'地区からは続々と押型文土器が出土し、一同を喜ばせたが、E'地区は伊址や住居址の基盤の洗い出しに時間がかかり生居址の全発掘は未了に終つた。

発掘分担はD'地区は魚津市東部中学校生徒約25名、記録者杉原、二塚、生徒指導者高島先生である。E'地区は、魚津高等学校歴史クラブ員約18名記録上里、外に小島、高木等が参加した。考古学部員や大谷氏、広田氏等は全体を指導した。5時頃作業中止、この夜は、光学坊（大谷氏）に宿泊し、懇談会を開き有意義であった。

8月29日（火曜）晴

昨日に続き発掘続行、D'地区では押型文土器を追うて縦形に南方へ進出した。特に中期土器と早期土器との層位的関係を鮮明にし、且つ早期土器の底部を発見して効果があつた。E'地区では西方への発掘を一先ず中止して、全貌を洗い出し、すべて東方へ進出し基盤を追跡した。然し全住居址を発掘し得なかつた。午後3時頃終了、発掘地を旧の如く埋めて、一応今年度の発掘を終了した。

III. 発掘記録

1. D'地区発掘記録

1960年の発掘(D地区)に於いては、東北側2mの間に於いてのみ押型文が発見されたので、この度はこの箇所を起点として東方の谷に向かつて7mの予定地を取つた。更に後になつて1mを延長し、それを又南方へ巾2m長さ4mを延長した。その結果下記の成果を得たのである。(附図2発掘図、断面図参照)

先ず押型文土器の出土状況を述べることとする。(注No.は採集順。(A)は東南側、(B)は西北側、(a)は南西側、(b)は北東から測つた距離。単位cm)

- No. 8 = (B) 360 (b) 82 : -46 (2片)
- No. 10 = (B) 360 (b) 87 : -50 (1片)
- No. 13 = (A) 17 (a) 0 : -34 (2片)
- No. 13' = (A) 38 (a) 40 : -60 (2片)
- No. 15 = (B) 455 (b) 0 : -45 (1片)
- No. 18 = (A) 0 (a) 12 : -35 (3片、底部)
- No. 22 = (B) 680 (a) 0 : -40 (1片)
- No. 23 = (A) 100 (b) 27 : -48 (3片、口縁部)
- No. 27 = (A) 90 (b) 17 : -28 (2片)
- No. 28 = (A) 100 (b) 55 : -60 (2片)
- No. 30 = (B) 635 (a) 0 : -65 (1片)
- No. 32 = (A) 35 (a) 50 : -55 (2片)
- No. 33 = (A) 50 (b) 50 : -45 (2片)
- No. 36 = (B) 615 (b) 205 : -65 (1片)
- No. 37 = (B) 730 (b) 230 : -36 (1片)
- No. 38 = (B) 710 (a) 33 : -65 (1片)
- No. 39 = (B) 730~760 (a) 130~140 : -65 (17片)
- No. 40 = (B) 635 (b) 262 : -90 (7片)
- No. 43 = (B) 700 (b) 300 : -65 (1片)
- No. 44 = (B) 725 (a) 50 : -50 (4片)
- No. 45 = (B) 735 (a) 75 : -50 (1片)
- No. 46 = (B) 690 (a) 40 : -40 (1片)
- No. 47 = (B) 720 (a) 10 : -40 (17片)

以上の記録及び断面図によつて明らかかなように、我々は起点(南西側)から2.80mの地点に至るまで何物も発見していない。そしてこの2.80m地点に於いて始めて深度60cmでは土器片(中期)No.9、75cmでは自然石No.6を採集した。併しこの埋藏は図によつて明らかかなように、N.5の自然

石と共に、1960年の発掘箇所D地区に属するもので、恐らくはその復原の際に土と混入したと見做すべきで、この3点はその本来の埋蔵と見ることが出来ない。次に断面図は、3mから6mの埋蔵では、中期の土器が早期の押型文よりも下層に於いて発見されたことを示している。このことは一見矛盾しているようであるが、それは恐らくは農耕によつて土層が顕微されたと見るべきで〔山の芋（長芋とも云つている）を栽培するには1m余を掘る〕、たゞこのように中期遺物が早期遺物よりも下層に於いて発見されたとは云え、前者は黒色粘土の中に、後者は赤褐色粘土の中に於いて採集されている。このことは明らかに土層の顕微を物語るものであつて、それ故に又数年前魚津市東部中学高島清祐教諭がこの地点の表面に於いて押型文を採集されたと云うことも理解出来るのである。その他は、断面図や南西隅の実測図及びその写真的示す通り、表土より30cm前後に於いて中期遺物を発見し、約15cmの黒褐色粘土層（この層中には埋蔵物はない）を経て赤褐色粘土層において早期押型文が見られる。尚基盤はこの赤褐色粘土層よりも更に10cm乃至30cmの下層になつてゐる。

2. E'地区発掘記録（住居址）

昨年発掘未了のため住居址の全貌を明らかにし得なかつたので、今年は既続発掘し、調査未了の東方、南方、西方へ夫々、2m幅延長して発掘した（附図3住居址平面図参照）

発掘担当には先年未だ豊富な経験を積んでいた魚津高校歴史クラブ員を依頼した。それは住居址の基盤の追跡、洗い出しあは初心者には困難だからである。然し、残念ながら発掘者の時間と労力の不足のため住居址の全貌を明瞭にし得なかつた。

その収穫は大体は昨年の発掘の通りで新事実は少なかつた。（上巻参照）

主なる調査事項は次の通りである。

- ・ 住居址の基盤は赤褐色ローム層で、その上は黒色腐植土で蓋っていた。基盤は大体平らで、地表下約50cm程である。踏み固められていた。住居址は故に現地表より約50cm程地下に埋没していたわけである（附図3断面図参照）
- ・ 南西方の炉址から2m～3m程離れた所に高さ20cm～30cm程、巾50cm～100cm程の土堤らしきものがあつた。（附図3参照）

これは、住居址の後方やや高みにあり、雨露の住居址への浸入を防ぐによう。また南西の卓越季節風の方向もある。然し、住居址の外壁の土堤かどうかは発掘面積少なく確認されなかつた。

- ・ 前記の土堤の外及び土堤の上に數個の自然石があつた。大きさは図の如く枕大からその二倍大程度である。この地は元来ローム層土地帯で、自然石のない所である。原始人がどこからか運んで利用していたらしい。然し何に使用していたかは確認されなかつた。
- ・ 磨石の出土が割合に多かつた。磨石器がこの地に多いからであろうか。
- ・ 昨年の発掘と考え合せて石斧の出土が多い。石斧には、磨製、打製両方ともにあつた。
- ・ 穴一個（P. 9）新たに発見した。恐らく柱の穴であろう。穴は前年のものと共に全部垂直であつた。
- ・ 土器は割合に少なかつた。殆ど中期のものであつた。杯型の殆ど完形品が1個出土した。（別記）

外に復原可能の土器は出土しなかつた。

- ・ 自然遺物としては、炭化した栗の実1個出土した。（別記）当時の食生活を物語つて面白い。
- ・ 側溝等はなかつた。
- ・ 別記の図中の炉址、柱穴P8、P1、P2は昨年発掘のものである。断面図等より考えて、柱穴P1は、柱穴としては大き過ぎるようと思われるが如何だろうか。
- ・ 窓穴かどうかは、窓穴の壁を発見し得ず、確認されなかつた。
- ・ 今回は時間、労力の不足のため発掘の途中で中止し、再び耕土で埋没し復原した、但し炉址や柱穴等は海砂をつめ油紙等で覆つて後日の再発掘に備えた。
- ・ 将来、炉址を中心にして、全住居址を洗い出し、その全貌を明瞭にしたい。

IV. 遺物報告

我々は此の度の発掘では、押型文土器の外あまり報告に値する遺物を採集していない。それは、D'にしろE'にしろ、何れも1960年発掘と同一箇所を今一度確認する為に行つたものであるから当然の事であつて、後に詳しく述べるように、押型文土器の採集だけでもこの度の発掘の充分な成果と云うべきであろう。

A 自然 遺 物

「E」地区、深さ47cmの箇所で炭化した栗の実を1個採集した。俗に中栗（なかくり）と云つているところのもので、3個の中の真中の栗である。底辺1.4cm、胴部の一一番張つたところで1.7cm、高さ1.3cmの小さなものである。

B 石 器

a 打製石斧

「D」地区から完形品1点、(B) 775 (b) 265 : - 35の地点に於いて採集されたもので、石質は凝灰岩で大変軟らかい。(図版9、実測図版No. 25)

「E」地区からは完形品1点、欠けたもの1点。石質は安山岩質凝灰岩である。(実測図No. 27)

b 磨製石斧

3点何れも「E」地区の出土である。石質は褐色凝灰岩、蛇紋岩(飛騨変成岩類)である。(図版10、実測図No. 23、No. 24、No. 26)

c 異間石器

写真及び図版で見られる通り、刃物形の石器である。石質は粘板岩であつて、この種の石器にはふさわしくない石質を使つているように思われるが、明らかに加工されたものである。(図版12、実測図No. 28)

d 四 石

完全なもの4個、欠けたもの1個が採集されている。この中欠けた1個は「D」地区出土で、他の4個は何れも「E」地区出土である。(図版11)

この度の発掘では石鉄、石錐等その他の石器は採集されていない。石材は「D」地区出土の打製石斧(凝灰岩)を除いては何れも布施川あたりで入手出来たと思われる。凝灰岩は早月川上流の「よもぎ沢」あたりで見られるから、或はこの辺まで交渉を持つたものであろうか。

C 土 器

相当数の破片が採集されているが、それから復原されるところのものはない。「E」地区出土で小型の無文土器は縁を少々欠くだけで、殆ど完形品として出土している。(図版5、実測図1 No. 22) 押型文は上述の通り可なりの破片が採集され、口縁部、胴部、底部(尖底)等によつて、口縁部からは口径を算出し、胴部、底部から全形を推定出来たので別図のような想像復原図を作製して見た。それによれば口径、高さ共に35cm前後であり、形から云つて東北地方形と見られる。採集は出土の都度行われ、採集した人々も異つていたので、それぞれ採集No.をつけた結果23個の採集No.が数えられるが、文様、焼成、色合い、厚さから云つて、次に詳述する通り大体5種類に分けられることが分る。

1. 押型文土器

採集No.のあるもの計75片、他に雜の中に混入していたもの2片、これを次の5種に分けた。

(1) 実測図No. 1—No. 4。(2) 実測図No. 5, No. 6。(3) 実測図No. 7。(4) 実測図No. 8。(5) 実測図No. 9。

(1) 文、長径6~7mm、短径4~5mm。左へ斜行しているように思われる。口縁部では口唇が外傾し、口辺では厚さ5mm、口頭9mm、胴部では1cm~1.3cm、尖底もこの種類の中に入る。色は全体としては黄土色であるが、中には黒い部分も見られる。焼成もよく、感じでは後期の土器ではないかと思われる程である。(押型文No. 13, No. 13', No. 22, No. 23, No. 27, No. 18(底部) No. 33, No. 36, No. 37, No. 38, No. 39, No. 40, No. 43, No. 45, No. 44) (図版 13, 14, 15, 16, 17, 18。 実測図 1, 2, 3, 4.)

(2) 文は長円とは云い難く、むしろ菱形である。長径6mm、短径4mm、右傾か左傾か判明しないが、とにかく斜行している。口縁部2片あり、その1片には穴のあいているのがある。(No. 46)。他の一片は雜部に混入していたもので採集No.はない。(図版19, 20、実測No. 5, No. 6) この2片によつて見れば口唇はやゝ外傾している。縁の厚さは5mm、他の部分は9mm、色は赤褐色、焼成は粗悪でもろく、あらい砂や雲母が混つている。(図版19, 20, No. 46, No. 47)

(3) 実測図No. 7及び図版13のNo. 15で見られる通り、横1cm、縦4mmの矩形をゆがめたような文である。これもよく見れば斜行している。厚さは1.3cm、色は黒褐色、焼成は悪いが(2)よりも、もうくはない。あらい砂が混入している。

(4) 実測図No. 8によつて見られる通り底部 近い箇所である。文は長径5mm、短径3mm、厚さ1.2cm~1.3cm、色は黄褐色、焼成は中位、あらい砂が混じつている。(図版14のNo. 28)

(5) 実測図No. 9。文は長径6mm、短径3mm、厚さ7mm、色は赤褐色、焼成はいゝ方である。(図版14のNo. 8)

以上何れも文が斜行しているが、縁文の斜行することと関連して考えるべきであろう。

2. a 類土器(連続爪形文)

文様の説明は上巻に於いて詳しく述べてあるから、この報告書では採集されたものについて述べることとする。

口縁部5片、胸部3片(図版21、実測図No. 10, No. 11)

3. b 類土器（縦連続爪形文）

口縁部3片、胴部3片（図版22、実測図No.14、No.15）

4. c 類土器

実測図No.16、No.17に見られるc類土器は底部2片を合せて8片採集した。非常にまろく、文がはつきりしない。色は黒褐色、下部は半截竹管による平行沈線に連続刺突文が施されている。（図版23）実測図No.12、No.13が示すように、爪形文のある隆起線とc類手法が同時に用いられているものもある。

5. d 類土器（沈刻）

1片のみであつた。文が磨滅しているが、実測図No.18に示されるように、中央部に施された沈刻文からこれをd類土器として報告することにした。（図版27の左側真中）

6. e 類土器（隆起線文）

繩文に次いで一番多く採集されたものである。本報告では10片程と云うあいまいな記述をしたが、破片では他の即ちa類又はb類の一節であるかも知れないからである。あまり重視と思われないので実測図は作製しなかつた。（図版24）

7. f 類土器（縄文）

何時の発掘でも一番多く採集されるが、未だに復原可能のものが発見されない。（図版25）

8. g 類土器（無文）

無文土器としては小型の杯形の完形品1点が「E」地区において採集された。口径6cm、高さ4cm、褐色で焼成粗窓で非常にもらい。（図版5、実測図No.22）

9. h 類土器（疑似縄文）

黒色で光沢があり、その疑似縄文も美しいが、朱绘でもある。上巻で報告された黒色朱绘土器の一部でなかろうかと思われる。その他5片の土器が採集された。（図版26、実測図No.19、No.20）

10. i 類 土 器

実測図No.21の1片だけ採集された。（図版27）

11. j 類（雜）

図版27に示したものは雜ということにしてあるが、今少し大きく、文がはつきりしておれば上述の何れかに入るべきものであるかも知れない。

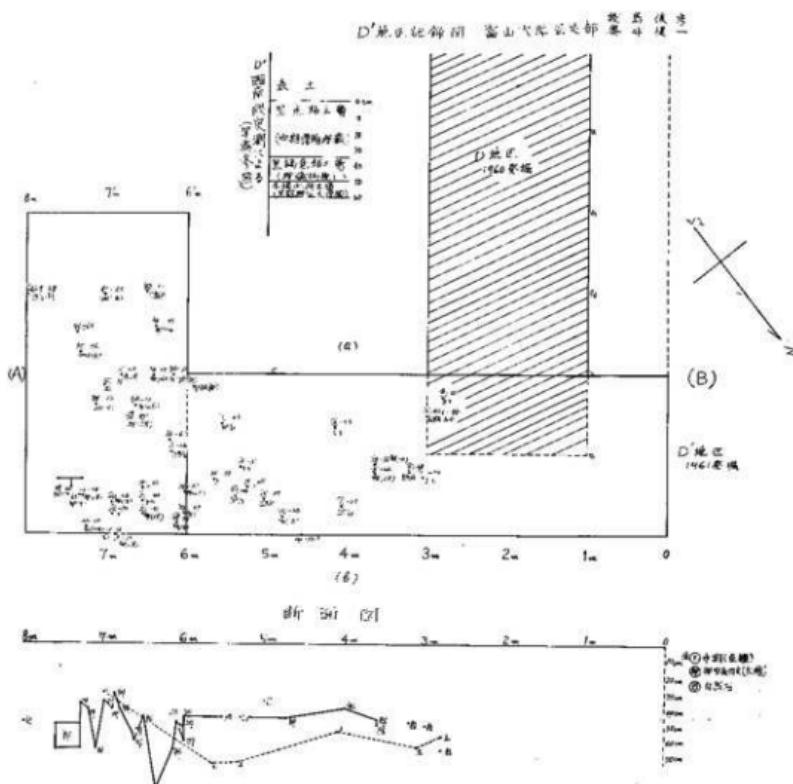
土器としてはこの他のものは採集されなかつた。今度も早期と中期をつなぐ何物も得られなかつたが、発掘目的からしてそれもまた止むを得なかつたのである。

V. 結 語

我々は1960年と1961年の二回に渡つて桜井遺跡の発掘を試みた。既に上巻において述べたように、桜井の遺物の中心をなすものは天神山式のものであるが、広い桜井のその一ヶ所に於いて早期遺跡としての確信を得る成果を得たことを喜ばねばならない。これまで桜井では、多くの人によつていろいろの遺物が採集されている。それらは私の手もとにはないし、又それの所有者によつても、何時、桜井のどの辺りで採集されたかは知ることが出来ない。天神山も広いが、一様の台地である。それに対して桜井は上野（うわの）地区から観音平と続き、而も所々谷によつて区切られている。上野地区でも土器片が採集されている。観音平で採集したと云う石斧は少なくとも天神山では見受けないところのものである。このように眺めて來ると、桜井を中心とした上野から観音平と云う鞍形台地は極めて広い縄文式文化の遺跡と云わねばならない。桜井自体にしても、我々が発掘を試みた箇所の南西に小さい谷間があり、それを経て一つの台地があるのであるが、人々はこの台地ではよく滑石製の玉類を採集している。今もなおこの台地に足を踏み入れると滑石の破片をよく手にすることが出来る。このように見て來ると、僅か二回ばかりの発掘では桜井に於ける縄文式文化を語ることは極めて危険と云わねばならない。併しながら、既述のように、早期文化と、天神山式文化、更にそれより下る串田新式、気泡式は層位を異にしつゝも同一地区に同居することが知られ、この二つの時代をつなぐ前級文化が此處には存在しなかつたと云うことが出来る。黒部市東布施の嘉例沢や福平では前期遺物が採集されている。嘉例沢は布施川を隔て、桜井からはかなり遠いと云えるが、福平とは山続きであり、桜井、天神山などで発見される砥石の産地は何れも福平産と見做されるから、今後もしも桜井において、嘉例沢や福平で見られる前期遺物が発見されなかつた場合、桜井から嘉例沢、福平への民族の移動が考えられることになる。併しこの結論を出すには更にもつと発掘を試み、研究を重ねることが必要である。このような大きな発掘や研究にはその準備の為にしばらくの時間を要すると思ふ。その準備期間中に、嘉例沢や福平を、或は黒部市、魚津市の先住民遺跡を充分に歩いて見る必要がある。既に採集された遺物について研究しなければならない。このような準備を整て、今一度桜井の発掘を試み度いと願つてゐる。

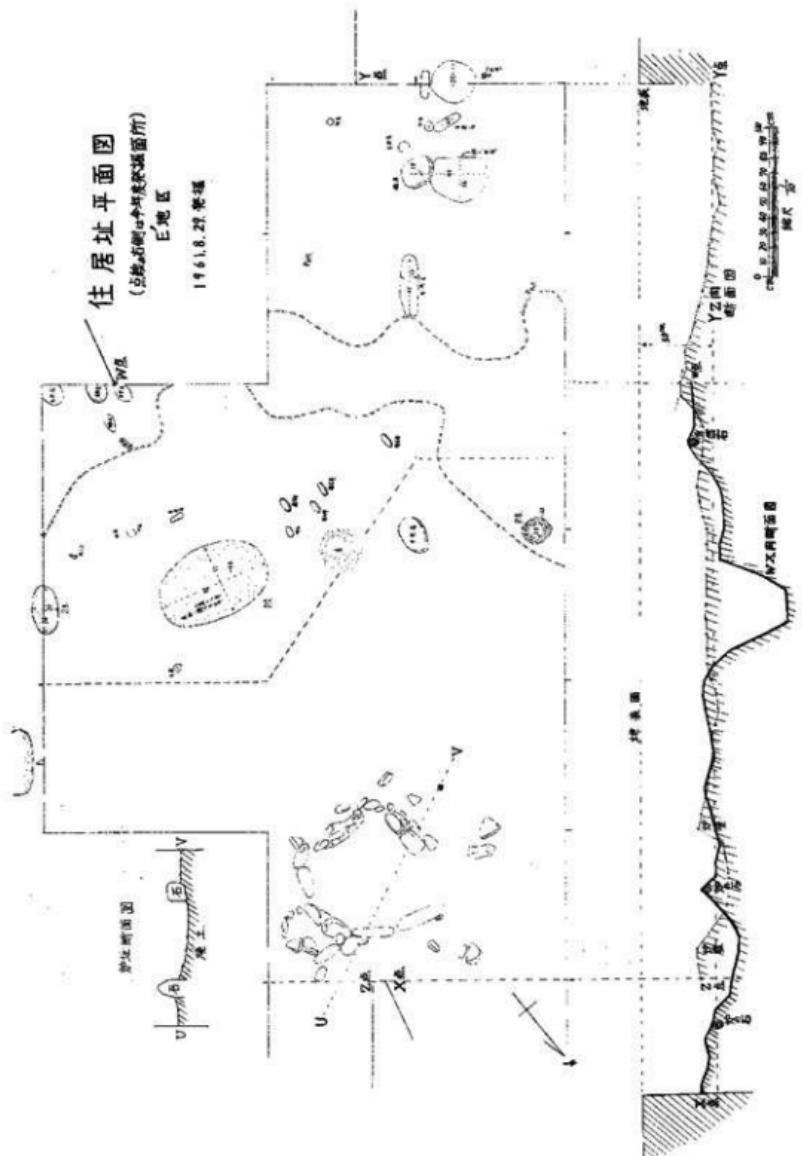
我々は既に目的的簡略で述べたように、1960年発掘の再確認が目的であつたから、此処に特に報告しなければならない新事実の発見のなかつたことは当然である。従つて結語としては、上巻に於いて述べた以上一步も出なかつたのであるが、この下巻を発表するに當り、私見を述べて結びとした次第である。

D' 地区発掘記録図

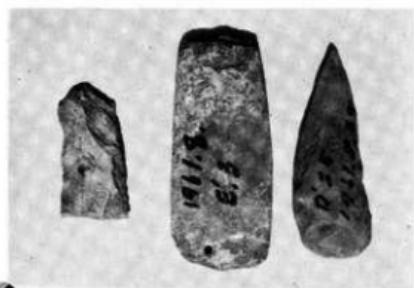


附圖2

附圖2



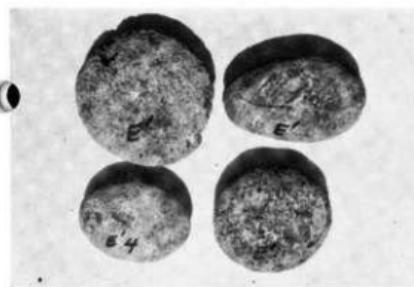
石 器



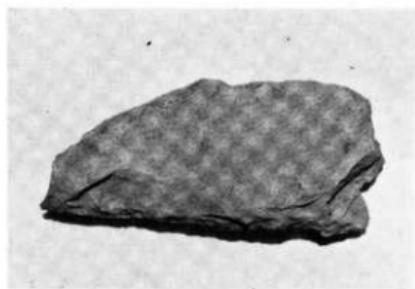
圖版 9 石 斧



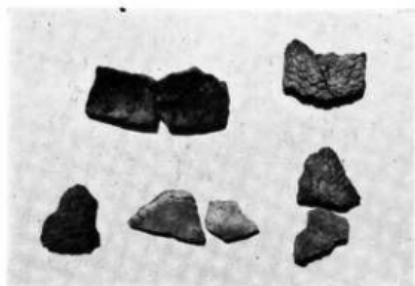
圖版 10 石 斧



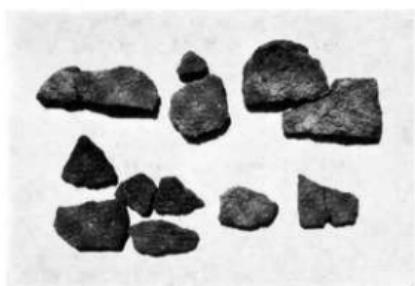
圖版 11 石



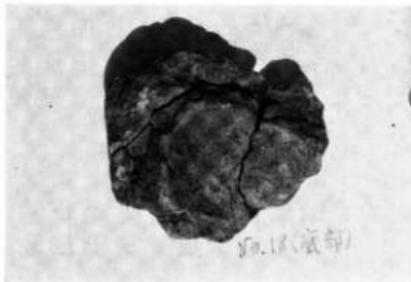
圖版 12 疑問石器



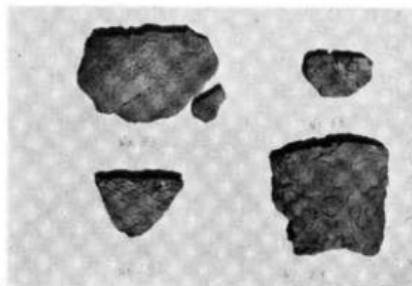
図版 13 押型文土器



図版 14 押型文土器

図版 15 押型文土器
下から見る(底部)図版 16 押型文土器
上から見る(底部)

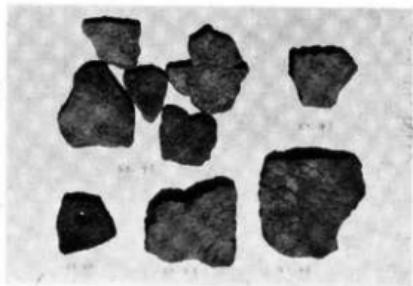
土 器



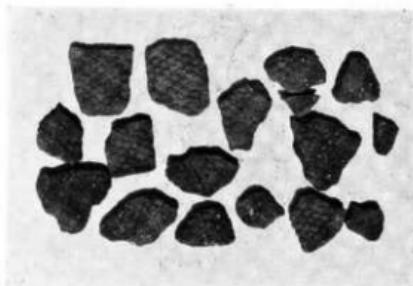
圖版 17 押型文土器



圖版 18 押型文土器



圖版 19 押型文土器

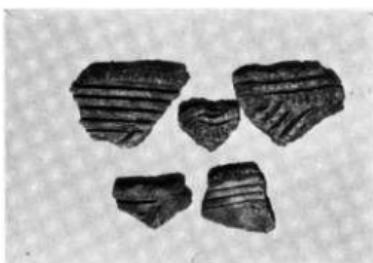


圖版 20 押型文土器

土 器



圖版 21 a 類土器



圖版 22 b 類土器

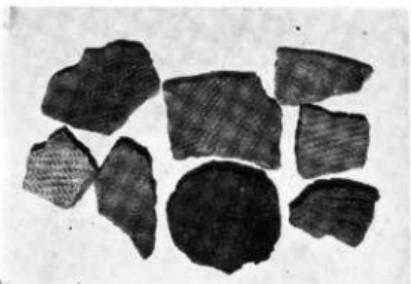


圖版 23 c 類土器



圖版 24 e 類土器

土 器



圖版 25 繩文土器



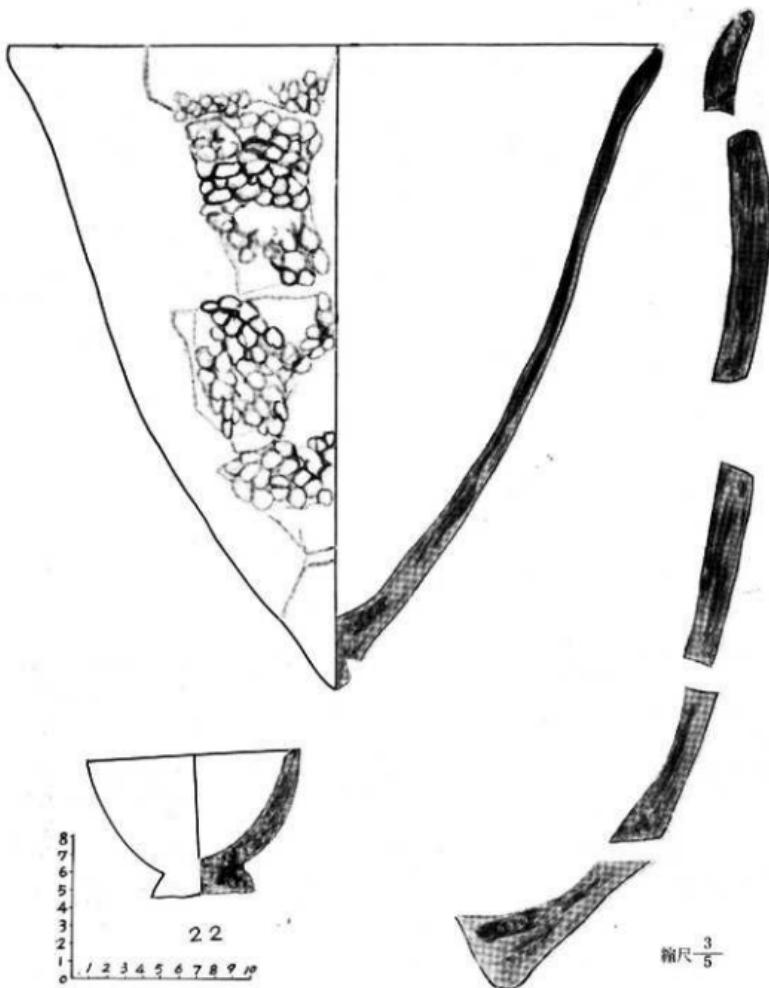
圖版 26 欺假繩文土器



圖版 27 雜

実測図 I

押型文土器復原図及び無文小型土器実測図



実測図Ⅱ 石器

磨製石斧



E' 地区出土

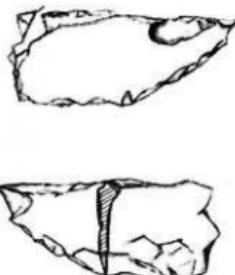
打製石斧



縮尺 $\frac{1}{2}$

D' 地区出土

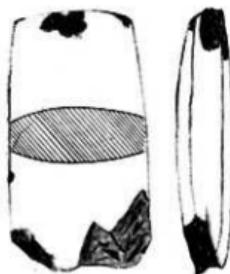
石器



28

出所不明

磨製石斧

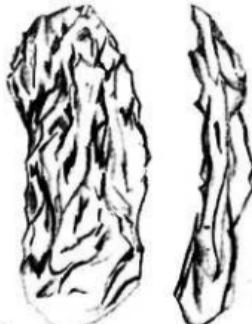


26

縮尺 $\frac{2}{5}$

E' 地区出土

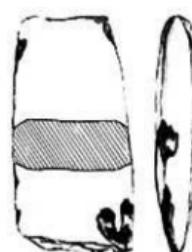
打製石斧



27

E' 地区出土

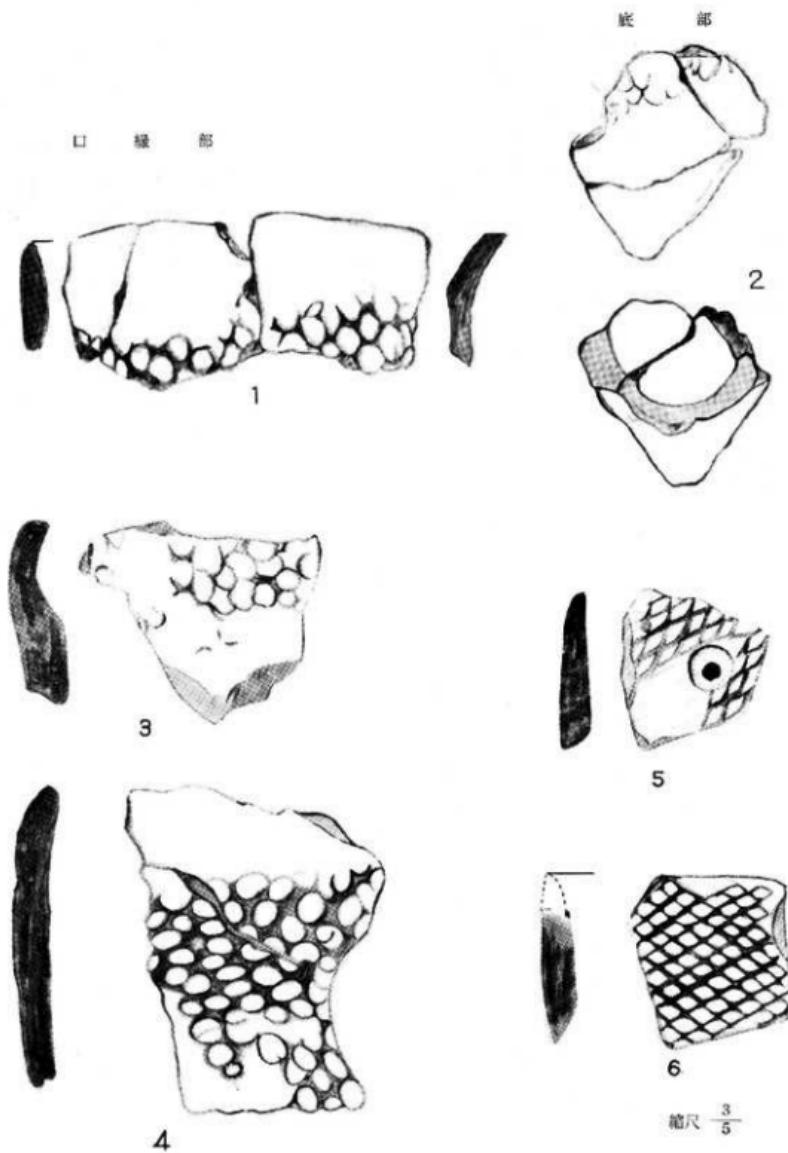
磨製石斧

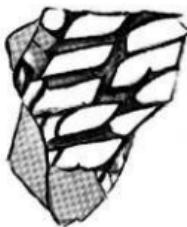


28

E' 地区出土

実測図 III 土器押型文

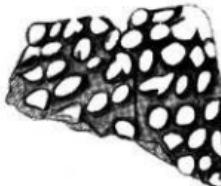




7



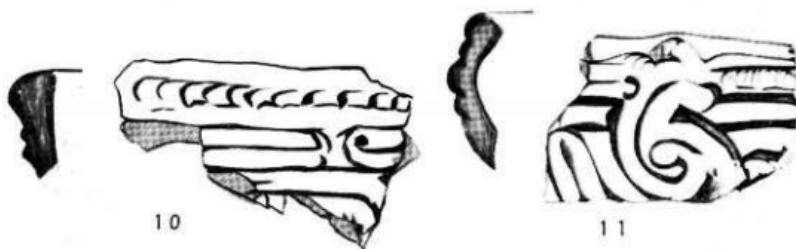
8



9

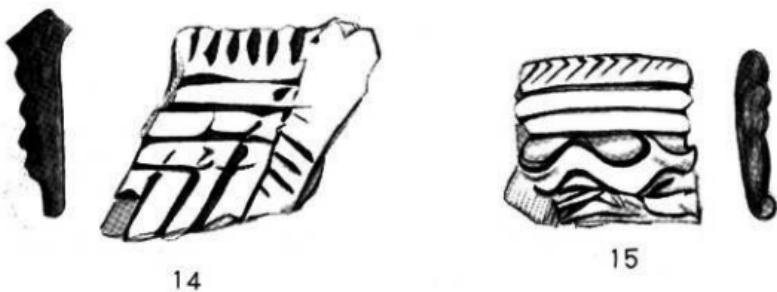
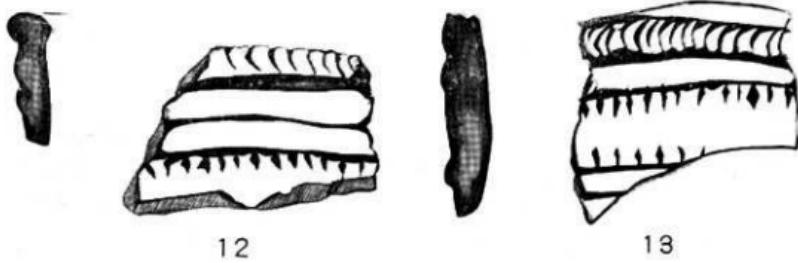
縮尺 $\frac{3}{5}$

実測図 IV 土 器



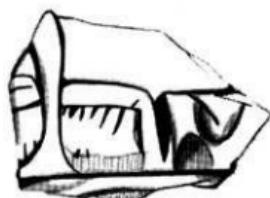
口 線 部

肩 部

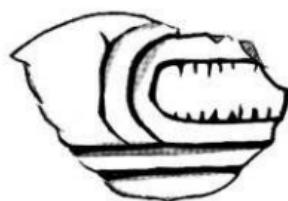


縮尺 $\frac{3}{5}$

実測図 V 土 器



16



17



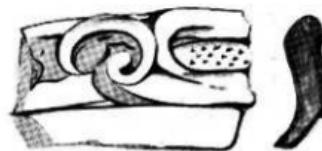
18



19



21



20

縮尺 $\frac{3}{5}$

昭和37年3月20日印刷

昭和37年3月25日発行

発行者

富山県教育委員会

魚津市教育委員会

印刷所

富山市新桜町36

明治印刷株式会社

